

イースター礼拝説教「あの方は先に行かれる」

日本基督教団石神井教会 2018年4月1日

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節

³それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章1～18節

¹週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。²そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」³そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。⁴二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。⁵身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。⁶続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。⁷イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。⁸それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。⁹イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。¹⁰それから、この弟子たちは家に帰って行った。

¹¹マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、¹²イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。¹³天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」¹⁴こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。¹⁵イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」¹⁶イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。¹⁷イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」¹⁸マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

「わたしは主を見ました」

イースターの朝を迎えました。主がよみがえられた朝です。キリストの復活のいのちにあずかる朝です。「ハレルヤ」「主をほめたたえよ」との讃美の歌声が、もっともふさわしい日です。この日を共に迎え、喜び祝うことができるのは、なんと幸いなことでしょうか。

今日、イースターを迎えた世界中の教会で、祝いの礼拝が重ねられていることでしょう。伝統的な習慣を受け継ぐ多くの教会では、この日の朝を迎える前から、昨夜のうちから、すでにイースターの祝いの礼拝を始めているはずです。イースターの朝の日の光が待ちきれないかのように、いいえ、きっと、イースターの朝の光の兆しを見出すのに少しも出遅れることがないように、夜中の、まだ暗いうちに、備えて集まらないわけにはいかないのでしょうか。

わたしが育った教会では、イースターを迎えるまでの一週間、毎朝、早天祈祷会をしていました。日の出はとうに過ぎた時間に教会堂内の会議室で行う祈りの会でしたが、中高生や若い人たちもこぞって参加していました。この早天祈祷会に加わらずには、イースターの祝いの日を迎えた気になれなかったのです。

神学生の最後の年に出席していた教会では、イースターの朝早く、教会の立つ丘の上に集まって、野外で礼拝をしていました。丘の上には、納骨堂がありました。納骨堂の扉が大きく開かれ、東の空に朝日が昇るのを見ながら、イースターの第一の礼拝を始めるのです。神学生のわたしは、自宅から一時間半もかけてその教会に通っていましたが、牧師からは「必ず出席するように」と厳命されていたので、人数合わせかと思っておりましたが、とんでもありません。多くの教会員がそのイースターの早天礼拝に集まり、それから一日、イースターの礼拝に重ねてあずかり、祝いの喜びを分かち合っていたのです。

皆さんの中にも、今日の日を指折り数えて迎えてくださった方が、いらっしやることでしょう。朝一番にとはいかなくても、いつもより少し早く家を出られたという方は、あるのではないのでしょうか。この日の祝いの準備のために、そうしてくださった方もあるでしょう。すでに昨日も、午前、午後と多くの方が教会に集まって、準備をしてくださっていました。

イースターの朝を、わたしたちは皆、心待ちにして迎えたのです。この日を迎えて、どうしてもせずにはいられないことがあるからです。この日、イースターの祝いの日に、わたしたちは、「主を見たい」と思っているのです。「光り輝くご復活のキリストを見たい」のです。今日は、見ることができる日なのです。「主を見る」ことができる日なのです。そのことを知っているから、わたしたちは、この日を心待ちにして迎えました。朝を迎えるのももどかしいほどの思いをもって、この日を迎えました。

「わたしは主を見ました」。今日、わたしたちは、そう言いたいのです。マリアと共に、「主を見ました」と言いうる者になりたいのです。いいえ、確かに主のお姿を見て、主を見る者とされて、「主を見ました」と告げる者になりたいのです。

二人の弟子と二人の天使

イースターの祝いの礼拝にお集りの皆さんの多くは、すでに洗礼を受けた信者でしょう。けれども、中には、「まだ自分は信者ではない、信じているとは言えない」とおっしゃられる方も、あるかもしれません。そういう方の中には、わたしたちがこのように礼拝に集まっているところで、「主を見る」というようなことを言っていると、いぶかしく思われる方もあるかもしれません。二千年前に十字架刑に処せられて葬られた人、主イエス・キリストを、今、この場所で行われている礼拝の中で、どうして見ることができるのか、と。

けれども、わたしたちは、日曜日に集まり、礼拝にあずかるたびに、主イエス・キリストを見ているのです。いいえ、むしろ、主イエス・キリストを見ようとして、礼拝に共にあずかっている、と言うべきかもしれません。わたしたちは、主イエスを信じる者です。その教えだけでなく、その存在を信じる者です。今も、わたしたちの全生活に同道してくださる存在として、信じているのです。とは言え、わたしたちは、日々の生活で、いつも主イエスの存在を意識し続けているかという、必ずしもそうはいかないのです。主イエスの存在を忘れ、見失い、うっかりすると、主イエスなしでもやっていけるとさえ考えるようになる。そのわたしたちが、日曜日ごとに教会に集められ、共に礼拝にあずかるとき、ここで、再び主イエスを見出すようにされるのです。共に集まり礼拝にあずかるわたしたちの真ん中においでくださっている主イエスを、見出すようにされるのです。

週の初めの日の朝早く、まだ暗いうちに、主イエスを見ようとやってきたのは、マグダラのマリアです。おそらく、ほかの婦人たちと一緒にだったでしょう。彼女たちは、墓の中に葬られているはずの主イエスを見ようと、やって来たのです。もちろん、主イエスのご遺体を見るのは、つらいことだったでしょう。それでも、そこに来て、そのお姿を見て、生前の面影を思い起こすことができるならば、いくらかの慰めになるはずでした。ところが、いざ墓に行ってみると、入り口の石は取り除けられており、主イエスのご遺体は見当たらないのです。

「**主が取り去られました**」。主イエスのことであれば、あの弟子たちに聞けばわかるかもしれないと、マリアは考えたでしょう。シモン・ペトロともう一人の弟子のところに、急いで行って、告げたのです。ところが、弟子と言えども、主イエスを見出せないことはあるのです。二人の弟子は、ただ、主イエスの姿がないことの証拠だけを示して、マリアの前からは立ち去ることになったのです。

ところが、二人の弟子の代わりに、マリアの前に現れた者がありました。二人の天使です。白い衣を着た二人の天使。ほかの福音書が伝えるところによれば、実のところ、彼らも、二人の弟子たちのように、主イエスの姿のないことを指し示したのです。けれども、白い衣を着た二人は、マリアにとっては、まさに天使でした。「**なぜ泣いているのか**」と彼らに問いかけられて答えたマリアは、突如として、目が開かれていくのです。見えていなかった主イエスの姿を、見るようにされていくのです。

このマリアの思いに語りかけた二人の天使。何者だったのか、気になります。

石は取り除けられている

白い衣を着た天使。それは、背中に羽の生えた超自然的存在でしょうか。

この後、一人の洗礼式を執り行います。わたしが牧師として執り行わせていただくときは、必ず、洗礼式の中で一枚の真新しい白い布をお渡しすることにしていきます。受洗者には、あらかじめ「注がれた洗礼の水が滴ったときに拭いてください」と言っているものですが、本当は、真新しい白い衣をお渡ししたいのです。洗礼によって新しく生まれる人に着せられる、真新しい産着です。

古い時代の教会では、洗礼が授けられた後、水の中から上がった受洗者に、真新しい白い衣が与えられたそうです。今でも、そのことを心にとめて、白い「洗礼着」を着て洗礼にあずかるという習慣を続けている人たちがいます。それは、しかし、単なる産着ではありません。「キリストの衣」なのです。使徒パウロは、洗礼を「キリストに結ばれる」こととして教えていますが、「洗礼を受けてキリストと結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている」（ガラテヤ 3:27）とも教ええました。洗礼を受けた者は、その日、新しく生まれて、古い衣ではなく、新しい「キリストという衣」を着て生きる者となる。そのキリストは、あの高い山に登られたときにお示しになられたような、神のご栄光をお受けになられて真っ白に輝く衣を身にまといわれているお方です。「白い衣」は、わたしたちがキリストを身にまとう者であることのしるしなのです。

わたしたちは、洗礼を受けようとする人を、洗礼によって、白い衣を着た者にしようとしています。「キリスト」という白い衣を着た天使にしようとしています。いいえ、今、洗礼を受けようとしている人だけではありません。わたしたちすでに洗礼を受けた者は皆、そうなのです。皆さん一人ひとり、**「キリスト」という白い衣を着た者、「白い衣を着た天使」の一人**なのです。

いつも、お互いを「白い衣を着た天使」として見出せるならば、幸いなことです。残念ながら、わたしたちは、「二人の天使」のようにふるまうよりも、あの「二人の弟子」のようにふるまってしまっ、信仰の仲間が主を見出すために何の役にも立たない者となってしまうことがある。けれども、そのわたしたちも、「キリスト」の白い衣を着せられた者なのです。天使の役割を果たしうる器とされている者なのです。「キリスト」を着た者として、天使の役割を果たすことを願うならば、わたしたちも、必ず天使として用いられるでしょう。

すでに石は取り除けられているのです。わたしたちを、役立たずのままに閉じ込めておこうとする試みは、もはや打ち破られています。石は取り除けられ、暗闇の中に光が差し込んでいます。その光は、わたしたちの内なる暗闇の中にはキリストがいらっしやらないことを、明らかにするでしょう。しかし、その光は、わたしたちを、天使の助けに向かわせます。天使の指し示すところ、わたしたちの外に目を向けさせます。そして、わたしたち自身ではない、天の御父と一つである御子キリストを見出させるでしょう。

この方を見るのです。この方の行かれるところを見るのです。そこに、わたしたちのあずかるべき真の命の道があるのです。